

1 情勢報告

J A土佐くろしお管内農業振興連絡協議会 第1回委員会開催



6月22日、J A土佐くろしお本所にて、J A土佐くろしお管内農業振興連絡協議会の第1回委員会を開催しました。この協議会は、J A土佐くろしお、振興センターの他、管内の市町で構成されており、連携して管内の農業振興を図ることを目的としています。

まず、これまで検討してきた土佐くろしお産地振興計画の第2刊の発刊を振興センターから提案し承認されました。

次に、ミョウガ、キュウリをはじめとした9チームのプロジェクトチームから昨年の活動のまとめと今年度の計画について報告がなされました。

最後に、各機関の情報交換を行い、新規就農者激励会の開催素案などについて協議を行いました。

今回新たに作成した土佐くろしお産地振興計画の第2刊に沿って、各機関が連携して産地振興に取り組んでいきます。

J A土佐くろしおニラ現地検討会が開催されました



現地検討会の様子
(須崎市)

J A土佐くろしお管内において、ニラの現地検討会が、6月29日に須崎市と中土佐町上ノ加江の2ヶ所において開催されました。

会では定植後の株養成期の栽培管理のポイント、最近導入されている有望品種の特性などについての検討がなされました。

特に栽培管理のポイントの中で、株養成期間の確保や病虫害防除については、生産者・J A・振興センターそれぞれの意見を出し合い、充実した株の養成に対して、参加者全員の技術向上へとつながる検討会になりました。

今後とも振興センターはJ Aと協力して、生産者の技術向上の支援を行っていきます。

鷹取キムチの新商品化に向けて



6月24日、梶原町「鷹取の家」において、地元のタケノコを使ったキムチの商品開発講習会を実施しました。当日は、以前に鷹取ドレッシングを商品化したときにお世話になった、韓国ソウル出身で高知市内に韓国料理店を営んでいる下元美子さんの指導を受けました。

試作品では、白菜用キムチヤンニョン味、焼き肉タレ味、醤油味、コチュジャン味を作り、試食により味を検討しました。これらの中で、参加者に最も好評だったのが白菜用キムチヤンニョン味であったため、これを基本に商品化を進めていくことになりました。

鷹取キムチの里づくり実行委員会では、キムチ商品を通年で出していくためにもハチクのタケノコの商品化を目指していくこととなりましたので、農業振興センターとしても県関連事業の活用やさまざまな販売シーンを利用し新商品開発のための支援を行っていきます。

1 情勢報告

津野町直販所むけ夏採りホウレンソウ栽培勉強会を開催しました。



7月13日、津野町直販所に出荷する夏採りホウレンソウ栽培の勉強会を開催しました。

農家11名が出席し、夏採りホウレンソウで最も重要である温度管理、圃場の土づくりから、播種、肥培管理、収穫方法までを学びました。

特にこの時期は野菜の消費が低下する梅雨時で、アンテナショップからの返品も次第に出始めており、一層の高品質生産、農薬の安全使用、出荷量の調整の必要性などについて質疑も交え積極的な勉強会になりました。

振興センターは今年度、直販所の基幹的な品目について栽培の基礎からの勉強会を開催する予定です。

J A津野山ミョウガ部会が現地視察研修会を開催しました。



須崎市 中氏

7月5、6日にJ A土佐くろしお並びにJ A四万十、また各ミョウガ部会の協力のもと、須崎市中氏と四万十町興津でミョウガの現地視察研修を開催しました。

5日は興津地区の土耕栽培、6日には中氏地区の養液栽培を視察し、J A津野山ミョウガ部会からは両日合わせて14戸が参加しました。

両産地とも1戸あたりの面積規模や、ハウスの規模もJ A津野山管内とは大きく異なる為、生産者からは感嘆の声も聞こえていましたが、土耕、養液栽培の生産者とも、自分の栽培技術向上につながるポイントを見つけようと、盛んに情報交換を行っていました。

また出荷場の視察も行い、農協の販売担当者と意見を交わした事で「良い物を生産し出荷する」という意識の向上につながりました。

振興センターは農協と協力し、生産者が今後も良質のミョウガを安定して生産・出荷していけるよう支援を行っていきます。



出荷場での意見交換

大野見産米エコ研究会溝きり機実演会



溝きり作業の様子

7月20日に中土佐町大野見で、大野見産米エコ研究会の会員9人が集まり、溝きり実演会が行われました。

近年、高温による玄米品質の低下が問題となっていますが、間断灌水や中干し、落水時期など水管理が栽培上重要です。今回は、J A四万十の協力のもと、落水時期まで灌水でき、根の活力維持となる溝きり作業を簡単に行うことができるスクーターのような「溝きりライダー」を使って実演会が行われました。

実際、農家に乗ってもらい、感触をつかんでもらいましたが、数回使用しただけで慣れ、実演会の後も使用されていました。また他の農家からも予約が入っていました。「10aでどれくらい時間がかかるろうか」「何条おきに走ったらいいろうか」など質問もあり、高品質米への取組意識が高まりました。

今後も、関係機関と共に、栽培指導や先進事例紹介などを行い、研究会活動の支援をしていきます。

1 情勢報告

J A土佐くろしおミョウガ部会目慣らし会の開催



研修の様子



目慣らしの様子

6月29日、7月2,3日に、J A土佐くろしおミョウガ部会目慣らし会が開催されました。大間および浦ノ内出荷場、上ノ加江支所の3カ所において、計8回行い、合計212名の参加がありました。

J A販売課担当者からは、販売状況を報告し、選果選別、出荷上の注意点を再確認しました。また、くろしお版ミョウガGAP点検シートによる点検活動も実施しました。

振興センターからは、「水やけ症」発症ステージ・発生要因について情報提供し、対策の検討を行いました。

今後、振興センターでは、試験研究機関と連携して「水やけ症」の原因究明と対策の確立を図っていきます。

須崎市下郷地区が集落営農へ一歩踏み出しました。



座談会の様子

須崎市下郷地区は6月27日、集落座談会を開催し集落営農について学習しました。

同地区は須崎市の平坦地に位置し、現在は大半の方が水稻を栽培していますが、機械を更新し難いことや高齢化の進行で、現状のままでは耕作放棄地が生じかねない状況のようです。

会では、パワーポイントを使って「集落営農とは」、またその進め方を振興センターが説明し、集落営農の理解を深めて頂きました。

今回、世話役が承認され集落営農の推進体制が整いました。また集落全員へのアンケートを実施し、現状と意見・意向を聞くことになりました。

世話役を中心に集落自らが動き決定する体制が整いつつあるので、振興センターは、須崎市など関係機関と連携して引き続きサポートしていきます。